

盗難

江戸川乱歩

青空文庫

面白い話しがあるのですよ。私の実験談ですがね。こいつを何とかしたら、あなたの探偵小説の材料にならないもんでもありませんよ。聞きますか。エ、是非話せて。それじや至つて話し下手でお聞きづらいでしょうが、一つお話ししましょうかね。

決して作り話しじゃないのですよ。と、お断りする訳は、この話はこれまで、たびたび度々人に話して聞かせたことがあるのですが、そいつがあんまり作つた様に面白く出来てるものだから、そりやアお前、何かの小説本から仕込んで来た種じゃないか。なんて、大抵の人が本当にしない位なんです。しかし、正真正銘いっつわ偽りなしの事実談ですよ。

今じゃこんなやくざな仕事をしていますが、三年前までは、これでも私は宗教に關係していた男です。なんていいますと、一寸立派に聞えますがね。実は下らないですよ。あんまり自慢になる様な宗教でもない。××教といってね、あなたなんか多分御承知ないでしょうが、まあ天理教や金光教の親類みたいなものです。もっとも尤も、宗旨しゅうしのものにいわせれば、それや色々もつたい体らしい理窟があるのですけれど。

ほんざん本山、というほどの大げさなものでもありませんが、そのお宗旨の本家は××県にありまして、その支教会が、あの地方の一寸大きい町には大抵あるのです。私のいました

のはその内のN市の支教会でした。このN市のは数ある支教会の内でも仲々はぶりのいい方でしたよ。それというのが、その主任——宗旨ではやかましい名前がついてますけれど、まあ主任ですね。それが私の同郷の者で古い知り合でしたが、そりや実にやり手なんです。といつても、決して宗教的な、悟りを開いたという様なのではなくて、まあ商才にたけていたとでもいいですかね。宗教に商才は少し変ですけど、信者をふやしたり、寄附金を集めたりする腕前は仲々あざやかなものでしたよ。

今もいった様に、私はその主任と同郷の縁故で、あれは何年になるかな。エート、私の二十七の年だから、そうですね、ちょうど今から七年前ですね。そこへ住み込んだのですよ。一寸したしくじりがありました、職に離れたものですから、どうにも仕様がなくて、一時のしのぎに、早くいえば居いそろう候をきめ込んだ訳ですね。ところが、一向足が抜けなくて、ごろごろしている内には、段々宗旨のことにもなれて来る、自然色々の用事を仰せおほつかる、という訳で、しまいにはその教会の雑用係として、とうとう根をすえてしまったのです。あれで、足かけ五年も居ましたからね。

無論私は信者になった訳ではありません。根が信仰心の乏しい所へ、内幕を知ってしまった、しかつめらしい顔をしてお説教をしている主任が、裏へ廻って見れば、酒を飲むわ、

女狂いをするは、夫婦げんかは絶え間がないという始末では、どうも信仰も起りませんよ。やり手といわれる様な人にはあり勝がちのことなんでしょうが、主任というのはそんな男だったのです。

ところが、信者となると、ああいう宗旨の信者はまた格別ですな。狂気みたいなのが多いのですよ。普通のお寺のことはよく知りませんが、寄進きしんなどでも、仲々派手にやりますね。よくまあ惜し気もなくあんなに納められたもんだと、私の様な無信仰のものには不思議に思われる位ですよ。随したがつて主任の暮し向きなんかぜい沢たくなものです。信者からまき上げた金で相場に手を出していた位ですからね。私は一体あきつぽいたちでして、これまで同じ仕事を二年と続けたことはない程ですが、その私が教会に五年も辛抱したというのは、そういう訳で、私などにも、自然実入りがたつぷりあつて、居心地がよかったからでしょうね。では、なぜそんないい仕事をよしてしまったか。さあ、それがお話しなんですよ。

さて、その教会の説教所というのは、もう十何年も前に建てられたもので、私がそこへ行つた時分には、大分いたんでもい、汚くもなっていました。それに、主任が代つてから、とにかく信者がふえて、可成かなり手狭であつたのです。そこで、主任は説教所を建増して広くし、同時にいたんだ箇所の手入をすることを思い立ちました。といつても、別に積立金が

ある訳ではなく、本部にいつてやった所で、多少の補助はして呉れるでしょうが、とても増築費全部を支出させる訳には行きません。結局は信者から寄附金を募^つる外^{ほか}はないのです。費用といつても、増築のことですから、一万円足らずで済むのですが、田舎の支教会の手でそれ丈^だけ寄附金を集めるというのは、仲々骨です。若^もし主任にさっきいった様な商才がなかったら、多分あんなにうまくは行かなかったでしょうよ。

ところで、主任のとつた寄附金募集の手段というのが面白いのです。こうなるとまるで詐欺^{さぎ}ですね。先ず信者中第一の金満家、N市でも一流の商家の御隠居なんですがね、その老人を、なんでも神様から夢のお告げがあつたなどとも^{たい}つ体^{たい}をつけて、うまく説き伏せ、寄附者の筆頭として三千円でしたか納めさせてしまったのです。そりや、こういう事にかけちやとてもすごい腕前ですからね。で、この三千円がおとりになる訳です。主任はそれを現金のまま備えつけの小型金庫の中へ入れておいて、信者の来る度に、

「御奇特なことです。だれだれさんは、もうこの通り大^{たい}枚^{まい}の寄進につかれて居ります」

などと思せびらかし、同時に例のまことしやかな夢のお告げを用いるものですから、たれしも断り切れなくつて、応分の寄附をする。中には虎の子の貯金をはたいて信仰ぶりを見せる連中もあるという訳で、見る見る寄附金の高は増して行くのでした。考えて見ると

あんな楽な商売はありませんね。十日ばかりの間に五千円も集まりましたからね。この分で行けば、一月もたたない内に予定の増築費は訳もなく手に入れることが出来るだろうと、主任はもうほくほくものなんです。

ところがね、大変なことが起つたのです。ある日のこと、主任にあてて実に妙な手紙が舞込んだじゃありませんか。あなた方のお書きになる小説の方では、一向珍しくもないことでしょうが、実際にあんな手紙が来ては一寸面くらいますよ。その文面はね「今夜十二時の時計を合図に貴殿の手許に集っている寄附金を頂戴に推参する。御用意を願う」というのです。随分酔狂な奴もあつたもので、泥坊の予告をして来たのですよ。どうです。面白いでしょう。よく考えて見れば馬鹿馬鹿しい様なことですけれど、その時は私なんか青くなりましたね。今もいう様に寄附金は全部現金で金庫に入れてあつて、それを沢山の信者達に見せびらかしているのですから、今教会にまとまった金があるということは一部の人々には知れ渡っているのです。どうかして悪い奴の耳に這入っていないとも限りません。ですから泥坊が這入るのは不思議はないのですが、それを時間まで予告して来るというのは如何にも変です。

主任などは「ナア二たれかのいたずらだろう」といって平気でいます。なる程いたずら

でもなければ、こんなわざわざ用心させる様な手紙を出す泥坊があるはずはないのですから。でもね、理窟はまあそういったものですけれど、私はどうやら心配で仕方がないので。用心するに越したことはない。一時この金を銀行へ預けたらどうだろうと、主任に勧めて見ても、先生一向とりあつて呉くれません。では、せめて警察へ丈けは届けておこうと、漸ようやく主任を納得させて、私が行くことになりました。

お昼過ぎでした、身支度をして表へ出て警察の方へ一町ばかりも行きますと、うまい工合に向うから、四五日前に戸籍調べに来て顔を見覚えていた巡査が、テクテクやつて来るのに出遇であつたものですから、それを捕えて、実はこれこれだといちぶしじゅう話したのです。いかにも強そうなヒゲ武者の巡査でしたがね。私の話を聞くといきなり笑い出したじゃありませんか。

「オイオイ、君は世の中にそんな間拔けな泥坊があると思うのか。ワハハハハハ、一杯かつがれたのだよ。一杯」

恐い顔をしているけれど、仲々らい落らくな男と見えます。

「しかし、私共の立場になつて見ますと、なんだかこう気味が悪くて仕様が無いのですが、念の為に一応御調べ下さる訳には行きますまいか」

私が押していますと、

「じゃね、ちょうど今夜は僕があゝの辺を廻ることになっているから、その時分に一度行って見て上げよう。無論泥坊なんか来やしないけれど、どうせついでだから。お茶でも入れておいて呉れ給え。ハハハハハハ」

と、どこまでも冗談にしているのです。でもまあ、来て呉れるというので私も安心して、くれぐれも忘れない様にと念を押してそのまま教会へ帰りました。

さて、その晩です。いつもなら、夜の説教でもない限り、もう九時頃になると寝て了うのですが、今夜はなんだか氣になつて寝る訳にも行きません。私は巡査との約束もあつたので、お茶とお菓子の用意をさせて、奥の一間で——それが信者との応接間だったので——その机の前に坐つて、じつと十二時になるのをまつていました。妙なもので、床の間においてある金庫から眼が離せない様な氣がするのです。そうしている内にすうつと中の金丈けが消えて行きやしないかなんて思われましてね。

それでも多少心配になるかして、主任も時々その部屋へやって来て、私に世間話などしかけました。何だか馬鹿に夜が長い様に思いました。やがて、十二時近くになると、感心に約束をたがえないで、昼間の巡査がやって来ました。そこで早速奥に上つてもらつて、

金庫の前で主任と巡査と私と三人が車座になってお茶を飲みながら番をすることにしました。いや番をする積つもりでいたのは、多分私だけだったかも知れません。主任も巡査も、昼間の手紙のことなんかで問題にしていけないのです。おまわりさん仲々議論家で、主任をつかまえて盛んに宗教論を戦わせている。先生まるでそんな議論をやる為に来た様なあんばいなのです。そりや、テクテクくら暗やみの町を巡廻しているよりは、お茶を飲んで議論をしている方が愉快に相違ありませんからね。なんだか私一人くよくよ心配しているのが馬鹿馬鹿しくなつたものですよ。

暫しばらくしますと、しやべりたいだけしやべってしまった巡査は、ふと気がついた様に私の顔を見ながらいうのです。

「ア、もう十二時半だね。それ見給え、あれはやつぱりいたずらだったな」

そうなる私もいささか恥しく、

「エエ、お蔭様で」とか何とかあいまいに答えたのですが、すると巡査が金庫の方を見て、「で、金はたしかにその中には入っているのだろうね」

と妙なことを聞くではありませんか。私はからかわれた様な気がして、いささかむつとしたものですから、

「無論這入つてますよ。なんならお目にかけましょうか」

と皮肉にいいかえたものです。

「いや、這入つていればいいがね。念のために一応調べておいた方がいいかも知れないよ。
ハハハハハ」

と先方もあくまでからかつて来ます。私はもうしゃくに触つて仕様がなものですから、
「御覧なさい」

といいながら、金庫の文字合せを廻してそれを開き、中のさつ束を取出して見せました。
すると巡査がね、

「なる程、そこですつかり安心してしまった訳だね」

私はうまく真似られませんが、そりやいやない方でしたよ。何だか変に奥歯に物はさまった様な調子で意味ありげにニヤニヤ笑っているのですからね。

「だが、泥坊の方にはどんな手段があるかも知れないのだ。君はこの通り金があるから大丈夫だと思つてゐるだろうが、これは」そういつて巡査はそこにおいてあつた札束を手にとりながら、

「これは、もうとつくに泥坊のものになつてゐるかも知れないよ」

それを聞くと、私は思わずゾツと身ぶるいました。こう何とも得体の知れない凄い氣持ですね。こんな風に話したんじや一寸分らないかも知れませんが。

何十秒かの間、私達は物もいわないでじつとしていました。お互に相手の目の中をみつめて、何事かを探りあっているのです、

「ハハハハハハ、分ったかね。じゃ、これで失敬するよ」

突然巡査はそういつて立上りました。さつ束は手に持ったままですよ。それから、もう一方の手には、ポケットから取出したピストルを油断なく私達の方へ向けながらですよ。にくらしいじやありませんか。そんな際にも巡査の句調くちようを改めないで、失敬するよなんていつてるんです。よつぽ胆たんのすわった奴ですね。

無論、主任も私も、声を立てることも出来ないでぼんやり坐ったままでした。どぎもを抜かれましたよ。まさか戸籍調べに来て顔なじみになっておくという新手しんてがあらうとは気がつきませんや。もうほんとうの巡査だと信じ切っていたのですからね。

彼奴きやつはそのまま部屋の外へ出ましたが、帰るかと思うとそうじやないのです。出たあとのふすまを僅かばかり開けておいて、その隙間すきまからピストルのつつ口を私達の方へ向けてじつとしているのです。長い間少しも動かないのです。暗くてよくわからないけれど、ピ

ストルの上の隙間からは、曲^{くせもの}者の片方の目玉がこちらをにらんでいる様な気がします。

……エ、分りましたか。さすがは御商売柄ですね。その通りですよ。かも居^いの釘から細い紐でピストルをつり下げて、如何にも人間がねらいを定めている様に見せかけたのです。

しかしその時の私達にはそんなことを考える余裕なんかありません。今にもズドンと来やしないかという恐しさで一杯ですからね。暫らくして、主任の細君がそのピストルの見えているふすまを開けて部屋へ入って来たので、やっと様子が分った様な始末でした。

滑稽^{こっけい}だったのは、そうした金を盗んで行く巡査を、いや巡査に化けた泥坊を、主任の

細君が玄関まで丁寧に送り出したことです。別に大きな声を立てた訳でも、立ち騒いだ訳でもないのですから、茶の間にいた細君には少しも様子が分らなかつたのです。そこを通る時曲者は「お邪魔しました」なんて、平気で細君に声をかけた相ですよ。「まあお見送りも致しませんで」と細君も一寸妙に思つた相ですが、兎^とに角^{かく}自分で玄関まで見送つたというのです。いや大笑いですよ。

それから、寝ていた雇人なども起きて来て大騒ぎになつたのですが、その時分には、泥坊はもう十町も先へ逃げている頃でした。皆のものが期せずして門^{かどぐち}口まで駈け出しました。そして、暗い町の左右を眺めながら、あちらへ逃げた、こちらへ逃げたと、下らない

ひようじよう
評 定 に時を移したものです。夜ふけですから、両側の商家なども、戸をしめて終しまつて、

町はまっ暗です。四軒に一つか、五軒に一つ位の割で、丸い軒燈がちらほらとさびしく光
つて居るばかりです。するとね、向うの横町からぼっかりと一つの黒い影が現れて、こち
らへやつて来るのが、どうやら巡査らしいじやありませんか。私はそれを見ると、今の泥
坊が我々に刃向はむかう為にもう一度帰つて来たのじやないかと思つて、ハツとしました。そし
て、思わず主任の腕をつかんで黙つてその方ゆびさを指したものです。

だが、それは泥坊ではなくて、今度は本物の巡査でした。その巡査が私達のガヤガヤ騒
いでいるのを不審に思つたと見えて、どうしたのだとたずねるのです。そこで主任と私と
が、ちようどいい所です。まあ御聞き下さいという訳で、盗難の次第を話しますと、巡査
のいうのには、今から追つかけて見た所でとても駄目だから、自分がこれから署に帰つて
早速非常線を張る様に手配をする、無論それは偽いつわりの警官に相違ないが、そんな服装をして
いれば人目につき易いから大丈夫つかまる、安心しろという事で盗難の金額や泥坊の風体
など詳しく聞きとつて手帳に書き込み、大いそぎで今来た方へ引返して行きました。巡査
の口ぶりでは、もう訳もなく泥坊をつかまえ金を取戻すことが出来る様な話だったので、
私達も大変たのもしく思い、一安心したのですが、さて、仲々どうしてそううまく行く

ものではありません。

今日は警察から通知があるか、明日はとられた金が返るか、その当座は毎日その事ばかり話しあっていました。ところが、五日たつても十日たつても、一向音沙汰おとさたがないではありませんか。無論その間には、主任が度々警察へ出頭して様子をたずねていたのですけれど、仲々金は返つて来そうもないのです。

「警察なんて実に冷淡なもんだ。あの調子ではとても泥坊はつかまらないよ」

主任は段々警察のやり方に愛想あいそをつかして、刑事主任が横柄な奴だとか、この間の巡査が、あんなに請合つておきながら、近頃では自分の顔を見ると逃げ廻つているとか、色々不平をこぼす様になりました。そうして半月とたち一月と過ぎましたが、やっぱり泥坊は捕まらないのです。信者達も寄り合など開いて大騒ぎをやっているのですが、何分そんな宗旨の信者のことですから、さてどうしようという智慧も出ないのです。そこで、とられたものはとられたものとして、警察にまかせておいて、改めて寄附金の募集に着手することになりました。そして、例の主任の巧たくみな弁口によって相当の成績を上げ、結局予定に近い寄附金が集まって、増築の方はまあ計画通りうまく行つたのですが、それはこのお話に関係がないから略するとして。

さて、盗難事件から二月ばかりの後のある日のことです。私は少し所用があつてA市から五六里隔った所にあるY町まで出かけたことがあります。Y町には近郷でも有名な浄土宗の寺院があるのですが、ちょうど私の行つた日には一年に一度の盛大なお説教が始まつていて、七日の間とか、その寺院の附近一帯はお祭騒ぎをやっているのです。輕業^{かるわざ}だとか因果^{いんがものし}者師だとかのかけ小屋が幾つも建てられ、色々なたべ物や玩具の露店が軒を並べ、ドンチャンドンチャンと大変な騒ぎです。

用事を済ませた私は、別に急いで帰る必要もなかったものですから、時候は長閑^{のどか}な春のことではあり、陽気な音楽や人声につられてついその盛り場へ足を踏み入れ、あちらの見世物、こちらの物売りと、人だかりの背後^{うしろ}からのぞいて廻っていたものです。

あれは何でしたっけ、確か齒の薬を売っている香具師^{やかし}の人だかりだったと思います。大きな男が太いステッキを振り廻して何だかしやべっているのが、大勢の頭の隙間から見えていました。それが如何にも面白そうなので、私は人だかりの大きな輪のまわりを、あちらこちらと、一番よく見え相な場所を探し歩き廻っていました。するとね、その見物人の中にまじっていた一人の田舎紳士風の男が、ヒョイト背後をふり向いたのですが、それを見た私はハツとして、思わず逃げ出そうとしました。なぜといって、その男の顔がいつか

の泥坊にそっくりだったのです。ただ違う所は巡査にばけていた時分には、鼻の下からあごから一面に髭ひげをはやしていたのが、今は綺麗にそり落されていた点です。ひよっとしたら、あれは顔形をかえる為のつけ髭だったのかも知れません。実に驚きましたね。

しかし、一度は逃げ出そうと身構えまでしたが、よく先方の様子を見ますと、別段私に気がついた風でもなく、また向うを向いてじっと中の演説を聞いていますので、先ずこれなら安心だと、その場を去って、少し離れたおでん屋のテント張りのうしろからそつとその男を注意していました。

私はもう胸がドキドキしているのです。一つはこわさ、一つは泥坊を見つけたうれしさでね。何とかして、こいつの後をつけて、住所を確め、警察へ教えてやる事が出来たら、そして、若し盗まれた金が一部でも残っている様だったら、主任を始め信者達もどれ程喜ぶだろう。そう思うと何だかこう自分が劇中の人物になった様な気がして、異様な興奮を覚えるのです。だが、もう少し様子を見て、この男がほんとうにあの時の泥坊かどうかを確かめる必要があります。人違いをやつては大変ですからね。

暫く待っていますと、彼は人だかりを離れてブラブラ歩き出しました。が、見れば二人連なんです。私はその時まで気がつかずにいたのですが、さつきからその男の隣に同じ様

な服装の男が立っていたのが、友達だったと見えます。ナア二、一人でも二人連でもあとをつけるに变りはないと、私は見つからない様に用心しながら、人ごみの事ですから二三間の間隔で、彼等のあとからついて行きました。あなたは御経験がありますか。人を尾行するのは実に難しい仕事ですね。用心しすぎれば見失い相だし、見失うまいとすればどうしても自分の身体を危険にさらさねばならず、小説で読む様に楽なもんじゃありませんね。で、彼等が、二三町も行った所で一軒の料理屋へ入った時には、私はホツとしましたよ。

ところが、その時に、彼等が料理屋へ入ろうとした時にですね、私は又もや大変なことを発見したのです。というのは、二人の内の泥坊でない方の男の顔が、不思議じゃありませんか、あの時泥坊を捕まえてやろうといったもう一人の巡査にそっくりだったのです。いやまって下さい。それでもう分ったなんて、いくらあなたが小説家でも、そいつは少し早過ぎますよ。まだ先があるのです。もう暫く辛抱して聞いて下さい。

さて、二人の男が料理屋へ入ったのを見て、私はどうしたかといいますと、これが小説だと、その料理屋の女中にいくらか握らせて、二人の隣の部屋へ案内してもらい、ふすまに耳をあてて話し声でも聞く処なんでしょうが、滑こつけいですね、私はその時料理屋へ上る丈けの持合せがなかったのですよ。財布の中には汽車の往復切符の半分と、たしか一円足

らずの金しか入っていなかったのです。そうかといって、あまりに不思議なことで、警察へ届けるという決断もつかず、またそんなことをしている内に、逃げられるという心配もあつたものですから、御苦労様にも、私は料理屋の前じつと張番をしていました。

そうして色々と考えて見ますと、どうもこれは、あの時最初に來た巡査がにせ物だつたと同じ様に、あとから來た巡査も、あの泥坊を捕まえてやるといった方ですね、それにもにせ物だつたと見る外はありません。実にうまく考えたものですね。前の半分はよくある奴でさして珍しくもないでしょうが、あと半分、つまりにせ物の次に又同じにせ物を出すという手は、如何にもよく出来てますよ。同じからくりが二つも重なつていようとは、一寸考えられませんし、それに相手がおまわりさんですから、今度こそ本物だろうと、たれしも油断しまさあね。こうしておけば、ほんとうの警察に知れるのはずっとあとになり、十分遠くまで逃げる事が出来ますからね。

ところが、そう考えてふと気がついたのは、若し奴等二人が同類だとすると、一寸辻つまの合^{あわ}ない点があることです。ええ、そうですよ。その点ですよ。教会の主任はあれから警察へ度々出頭したのですから、あとの巡査がにせ物だつたらすぐ分るはずですよ。さあ、私は何が何だかさっぱり訳が分らなくなつて終いました。

一時間も待ったでしょうかね。やがて二人は赤い顔をして料理屋から出て来ました。私は無論彼等のあとをつけました。彼等は盛り場を離れて段々さびしい方へ歩いて行きましたが、ある町角へ来ると、一寸立止つてうなずきあつたまま、そこで二人は分れて終しまつたのです。私はどちらの跡をつけたものかと、大分迷いましたが、結局金を持つて行つた方の、つまり最初に発見した男を尾行することにしました。彼はよつていたので、いくらかヒヨロヒヨロしながら、町はずれの方へと歩いて行きます。あたりは益ますます々々さびしくなつて尾行するのが余程難しくなつて来ました。私は半町もうしろから、なるべく軒下の影になつた所を選んで、ビクビクものでついて行きました。そうして歩いてゐる内に、いつの間にかもう人家のない様な町はずれへ出てしまつたのです。見ると行手に一寸した森があつて、中に何かの社やしろが祭つてある、鎮ちんじゆ守の森とでもいうのでしようね、そこへ男はドン入つて行くではありませんか。私はどうやら薄気味が悪くなつて来ました。まさか彼奴いつすまいの住居がその森の奥にある訳でもありますまい。一層断念して帰ろうかと思いましたが、折角ここまで尾行して来たのを、今更いまさら中止するのも残念ですから、私は勇気を出して、なおも男のあとをつけました。ところが、そうして森の中へ一歩足を踏み入れた時です。私はギョツとして思わず立ちすくんで終いました。ずっと向うの方へ行つているとばかり

思っていた男が、意外にも、大きな樹の幹のうしろからひよいと飛び出して、私の目の前につつ立ったじゃありませんか。彼はずる相な笑いを浮べて私の方をじっと見ているのです。

そこで、私は今にも飛びかかつて来やしないかと思わず身構えをしたのですが、ど胆ぎもを抜かれた事には、相手は、

「ヤア、暫くだったね」

と、まるで友達にでも逢った様な調子で話しかけるのです。いや、世の中にはずうずうしい奴もあつたもんだと、これにはあきれましたね。

「一度御礼に行こうと思つていたんだよ」と、そいつがいうのです。

「あの時は実に痛快にやられたからね。さすがのおれも、君んとこの大将には、まんまと一杯食わされたよ。君、帰ったらよろしくいつといて呉れ給えな」

無論、なんのことだか訳が分りません。私はよつぽど変な顔をしていたと見えます。そいつは笑い出しながらいうのです。

「さては君までだまされていたのかい。驚いたね。あれはみんなにせ札さつだったのだよ。ほんものなら、五千円もあつたから、一寸うまい仕事なんだが、駄目駄目、みんなよく出来

たにせ物^{もの}だったよ」

「エ、にせ札^{さつ}だって、そんな馬鹿なことがあるもんか」私は思わず怒鳴りました。

「ハハハハハ、びっくりしているね。何なら証拠を見せて上げようか。ほら、ここに一枚二枚三枚と、三百円あるよ。みんな人に呉れて終って、もうこれ丈^{だけ}しか残っていないんだ。よく見て御覧、上手に出来ているけれどまるきりにせ物^{もの}だから」

そいつは財布から百円札を出して、それを私に渡しながらいふのです。

「君はなんにも知らないもんだから、おれの居所をつき止めようとしてついて来たのだろうが、そんなことをしちや大変だぜ。君んとこの大将の身の上だぜ。信者をだましてまき上げた寄附金をにせ札^{さつ}とすり替えた奴と、それを盗んだ奴と、どちらが罪が重いか、いわなくても分るだろう。君、もう帰った方がいいぜ、帰ったら大将よろしく伝えて呉れ給え、おれが一度お礼に行きますといっていたとな」

そういつたまま男はさつさと向うへ行つて了いました。私は三枚の百円札を手にして長い間、ぼんやりと衝立^{つた}っていました。

なる程、そうだったのか。それですっかり話しの辻^{つじ}まがあう訳です。今の二人が同類だとしても不思議はありません。主任が度々警察へ様子を聞きに行ったなんて、皆出たら

目だったのです。そうしておかないと、ほんとうに警察沙汰になって、泥坊がつかまっては、にせ札のことがばれて終いますからね。予告の手紙が来た時にも驚かなかったはず。にせ物ならこわくはありませんや。それにしても、山師やましだったとは思いましたが、こんな悪事を働いていたとは意外です。先生、ひよつとしたら例の相場に手を出してしくじったのかも知れません。それで、どこからにせ札を仕入れて来て——支那人なんか頼むと精巧なものが手に入るといいますから——私や信者の前を取とりつくろ繕つくろっていたのかも知れません。そういえば色々思いあたる節もあるのです。よく今まで、信者の方から警察へ漏れなかったものですよ。私は泥坊から教えられるまで、そこへ気がつかなかった自分の愚さが腹立たしく、その日は家に帰っても終日不愉快でした。

それからというもの、なんだか変な具合になって終いましたね。まさか古い知り合の主任の悪事を公おおやけにする訳にも行きませんから、黙っていましたけれど、何となく居心地がよくないのです。今まではただ身持が悪いという位のことでしたが、こんなことがわかって見ると、もう一日も教会に居る気がしないのです。その後間もなく、外に仕事が見つかったものですから、すぐ暇をとって出て終いました。泥坊の下働きはいやですからね。私が教会を離れたのはこういう訳からですよ。

ところがね。お話しはまだあるのです。作り話してみたいだというのはこのことなんです。例のにせ札さつだという三百円はね、思い出の為に、それからずっと財布の底にしまっていたのですが、ある時私の女房が——こちらへ来てからもらったのです——その中の一枚をにせ札さつと知らずに月末の支払いに使ったのです。尤もそれはボーナス月で、私の様な貧乏人の財布にもいくらかまとまった金が入っているはずでしたから、女房の間違ったのも無理はありません。そして、何とそれが無事に通用したではありませんか。ハハハハハハ。どうです。一寸面白い話でしょう。エ、どういう訳だと仰おつしや有るのですか。いや、それはその後別に調べても見ませんから、今以て分りませんがね。私の持っていた三百円がにせ物ものでなかったことだけは事実ですよ。あとの二枚も引続いて女房の春着代になってしまった位ですからね。

泥坊の奴あの時実は本物の札を盗んでおきながら、私の尾行を逃れる為に、にせ札さつでもないものをにせ札さつだといって、私をだましたのかも知れません。ああして、惜しげもなくほうり出して見せれば、それも十円や二十円のはした金ではないのですから、たれしも一寸ごまかされますよ。現に私も泥坊の言葉をそのまま信用してしまって、別段深く調べても見なかったのです。しかし、そうだとすると、主任をうたぐったのは実に済まない訳で

す。それから、もう一人の、泥坊を捕まえてやるといった巡査ですね。あれは一体本物の
のでしうか、にせ物^{もの}なのでしうか。私が主任を疑った動機は、あの巡査が泥坊と一緒に
に料理屋へ上つたりしたことからですが、今になって考えて見ると、あの男は本物の巡査
でありながら後になって泥坊に買収されていたのかも知れません。又ひよつとしたら、職
務上ああして目星をつけた男とつきあつて、つまり探偵をしていたのかも知れません。主
任の日頃の行^{ぎようじよう}状が行状だったものですから、私はついあんな風に断定して終つたので
すけれど。

その他にも、まだ色々の考え方がありますよ。たとえば泥坊の奴にせ札^{さつ}のつもりで、う
っかりほかの本物を私に渡したと考えられないこともありませんからね。いや、結末^{はなは}が甚
だばんやりしていて、話しのまとまりがつかない様ですが、ナアニ、若し探偵小説になさ
るのだつたら、この内どれかにきめて終えればいい訳ですよ。いずれにしても面白いじゃあ
りませんか。……兎に角、私は泥坊からもらった金で女房の春着を買った訳ですね。ハハ
ハハハハ。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第1巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

2012（平成24）年8月15日7刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第三巻」平凡社

1932（昭和7）年1月

初出：「写真報知」報知新聞社

1925（大正14）年5月15日

※「何だか」と「なんだか」の混在は、底本通りです。

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

入力：門田裕志

校正：江村秀之

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

盗難

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>